

「こどものための物語」の類型研究

成田 千夏 (岩手大学大学院教育学研究科 1年)

1. 研究目的

中学校の英語教育に加え、小学校で平成 23 年度から外国語活動が必修化されたこともあり、日本人児童生徒に対する英語教育の研究が多くなされ、その中には、英語で書かれた絵本や児童文学を活用した授業の研究がある。白須 (2004) によれば、アメリカ、カナダ、オーストラリアでは第 2 言語としての英語 (ESL) の授業で児童文学が使用されることが定着してきている。英語で書かれた絵本や児童文学を通してリーディングの能力を養うことは、言語面でコミュニケーション能力の育成につながることは言うまでもなく、その他にも異文化理解や、更には人間の教育といった側面においても波及効果が期待できると考えられる。また、絵本はまだ自分で文字を読むことのできない幼い子どものために大人が読み聞かせをすることを念頭に置いて書かれた作品が多く、耳で聞いて理解しやすく、しかも快い響きとリズムを持っている、とされる (白須、2004)。たとえ聞いた英語が理解できなくても、挿絵によって内容理解を促すことができる、とされる (松浦、2012)。

物語を読むという行為には読者が直接その物語にかかわっていくという姿勢が伴い、それが外国の物語であれば、その国の文化や社会などに関する情報がストーリーの展開の中に自然に織り込まれている上、優れた作品は国や人種を超えた人間にとって普遍的なテーマを扱っている (白須、2004) ことから、日本人児童生徒に英語絵本が効果的であるように、日本語を母語としない児童生徒 (JSL 児童生徒) にとって日本語で書かれた絵本を使った指導も効果的なのではないかと考えた。

本研究では、「この物語を使って何が学べるか」ではなく、「これを学ぶためにどの物語が

使えるか」という視点での授業づくりを可能にするために、DLA の学習項目の学びにつながる話の展開の仕方や使われている表現を既存の物語から取り出し整理することを研究目的とする。DLA とは、文部科学省によって開発された日本語能力測定方法『DLA～外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント』(DLA : Dialogic Language Assessment) である。本研究で目標を DLA の学習項目に設定したのは、これが児童生徒の日本語能力を把握するための客観的な基準として全国どの学校でも、どの JSL 児童生徒にも使用可能なものであるためである。

物語は日本のものに限定せず、日本人児童生徒に馴染みのあると思われる世界の物語を含み、日本語で書かれた絵本とし、本研究ではこれを「こどものための物語」とする。

2. 研究方法

本研究では「こどものための物語」として、平田昭吾『世界名作ファンタジー』(ポプラ社) の 60 作品を扱う。今回、目標とする DLA の「読む」指導の段階と学習目標項目例は、① 大意を理解する (3-d)・登場人物や場面について理解する (4-c)、② 推測によって読む (3-e)・新しい知識・アイディア・感情・態度 (4-f)、である。これらの学習項目を観点として、その学習に、上記の 60 作品のどのような話の展開の仕方や表現が扱えるか、筆者が指導者になるとした場合に扱いたいと思うものを取り出す。その結果、今回目標とした各学習項目の学びのためにどの物語が使えるかを提案することができる。

3. 結果と考察

以下は結果の一部である。上記①について

は、話の展開の仕方から、『47 おおきなかぶ』や『49 ブレーメンのおんがくたい』は、時系列での場面理解に、『23 びきのこぶた』や『18 さるかにはなし』は、キャラクターの行動比較での場面理解に適していると考えられる。また、②については、『14 かちかちやま』や『22 おむすびころりん』は、題名に使われているオノマトペからどのような様子を表す言葉なのかを予想・推測しながら読むことに適している。『10 にんぎょひめ』は、登場人物の気持ちになることで、普段の生活にはない感情を味わうことに適している。『57 うさぎとかめ』は、望ましい児童の姿を伝えることに適していると考えられる。

取り出しの過程で、物語にはオノマトペが多用されていることが明らかになった。オノマトペとは、擬音語・擬態語の総称であり、日常生活で使用されることが多い。日本語はオノマトペが豊富な言語である、とされる(前田・上間・白水・松下、2015)。三上(2006)によると、オノマトペは、そのほとんどすべて〔副詞〕あるいは〔形容動詞〕として、また一部の語は〔名詞〕〔サ変動詞〕という品詞として分類されている。オノマトペが明確に識別されることは難しいが特徴もある。ある音がある事態や状態を象徴したりイメージさせたりするとき、それは紛れもなくオノマトペである可能性が高いということである。また、語基と異形が存在し、一つのオノマトペが生産され得るということである。これは、他の語に頻繁に見られることではなく、オノマトペが他の語から識別され得るはっきりした体系を持つ語群であることの証拠である。特定のオノマトペについて、複数の物語を読み比べることで感覚をつかんだり、同じ様子を表現する異なるオノマトペを比較することで、使用するオノマトペの違いによる感じ方の違いを味わったりすることができる。例えば、糸車の音を『6ねむりの森のひめ』では「コットンカラコロコットン」と、『7お

やゆびひめ』では「カラコロトントン」と表現している。

4. 成果と課題

DLAの各学習項目を指導するにあたり、あらかじめそれに適した物語が提案されていることによって、指導者は容易に素材となる物語を選ぶことができる。

今後の課題としては、挿絵の効果についての考察と、他出版社の絵本を扱うことで、同じ物語を複数の絵本で読み、比較できるようにすることである。

この研究は日本語教育の場だけではなく、国語科教育における比べ読みや多読の物語選びにも活用できる。日本語学習を日本語教育のみで行うものと捉えず、国語科教育と関連させながら行う方法も今後考えていきたい。

【引用文献】

- ・白須康子(2004)「中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用」『神奈川大学人文学会誌』154、pp.83-111
- ・平田昭吾『世界名作ファンタジー』ポプラ社 全60冊
- ・前田安里紗・上間大生・白水菜々重・松下光範(2015)「日本語学習者を対象としたオノマトペ学習のためのデジタル絵本システム」『人工知能学会論文誌』30巻1号SP2-A、pp.204-215
- ・松浦友里(2012)「小学校外国語活動における英語絵本の導入効果に関する実践研究」『岐阜大学カリキュラム開発研究』Vol.29 No.1、pp.94-101
- ・三上京子(2006)「日本語教育のための基本オノマトペの選定とその教材化」『ICU日本語教育研究』pp.49-63
- ・文部科学省(2014)『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA』
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm